

「短歌集」(令和5年1月)



# 〈歌・小説・日本語〉69 吉本隆明の短歌論

勝又浩

「吉本隆明短歌論集」と謳われた「ことばの力 うたの心」(幻戯書房)なる一冊が出た。最近の私の関心からするとまことにタイミングのよい、ラッキーな一冊でもあった。

今年(吉本隆明の歿後一〇年)になるが、全三九巻の全集(晶文社)も完結したし、全集には取まりきらない講演集(全一二巻、筑摩書房)なども出て、彼の仕事の全貌も見渡せるようになったから、この一冊もそうしたなかでの一つの成果でもあるのだろう。彼の歌論には他に、私の記憶では、長編の『初期歌謡論』と『写生の物語』があるが、この『ことばの力 うたの心』は、それらの体系的な論考とは違って、時々求めに応じてばらばらに書かれた短歌関連のエッセイや講演、対談などを

再構成している。いわば寄せ集めの一冊ではあるのだが、それ故に著者の肉声も聞こえるような、ごく近しい一冊でもあった。通読して、記憶にあった初出時の印象とは違った理解もできて、やはり教わるどころ考えさせられるところも多かったのである。そして、吉本隆明はやつぱり、どんなときにも原理的なのだ、そこが他の、上手な、器用な書き手たちとの根本的な違いなのだ、改めて認識したのだった。

余談になるが、私は彼の個人雑誌「試行」の創刊からの購読者で、まだよくも理解できないうちからの吉本信奉者の一人だった。そんな仲間が何人かいるが、つまり我々の世代はそのくらい彼の影響を受けているわけだ。そして、それ故に、ということになるだろうが、

ような、まずはこの著者でなければ出会えないであろうような人もいる、といった具合である。そしてこんな一人の歌人たちが著者の論点に従ってみて行くだけでも、短歌という文化が持つ豊かさや問題の大きさ、根の深さのようなものが見えてくるから不思議である。あげられている一八人は近代の歌人を代表するだけでなく、短歌が含んだ問題をも代表しているわけだ。

そうしたなかで、著者はたとえば次のように言う。「歌人は短歌形式による生活派的、または民俗的であらざるをえない」と。言い換えると、歌を詠むことは必然的に日常生活の端々を捉えて報告することになるか、さもなければ自然や風物への観察者、信奉者となつて振舞うことになる、というのである。そして、それ故に歌人たちは常に「形式によって先取りされたものと、時代的な個とをくみあわせ、矛盾させ、たかかわせる」、そういう格闘の場に立たされることになる、と。そして、そう

したなかで、たとえば斎藤茂吉は初めて、「子規、節、それから師伊藤左千夫を超えて」、「伝統の詩歌が、近代の文学意識と結合できた稀な偶然と、それを可能にした個性」(『赤光』論)であつた、と。それが茂吉の唱えた「写生」、「実相観入」の意味なのだ。

茂吉で言えば、彼の用語には「写生」の他にもう一つ「調べ」があつた。この「調べ」も短歌のなかの重要な、しかし正体の掴みにくい難しい問題の一つだが、著者はそれを独特な「音喩」ということばで追究している。本書最後の一章「結び 詩的な喩の問題」がそれである。簡単に言ってしまうと、チヨチチヨアワワの類の「乳児語」や、たくさんある擬音擬態語など、意味のない、リズムだけの音の連鎖、それが詩的言語の源流、原点だという説である。たしかに、チヨチチヨアワワで赤子がなぜ笑うのか分からないが、また赤子が笑えば大人も笑うという人類共通の事実真相もある。そういう原初的なコミュニケーションのなかに歌

彼の晩年のサブカルチャー批評や、その果ての原発問題についての発言にはどうにもついて行けなかった。いささかショックであり、落胆失望もして、以来、何となく疎遠になつてしまった。この間の経緯を書けば一編の文章が必要になるが、それはまたどこかで書くときがあるだろう。今度、短歌というテーマに引かれての久しぶりの再会であつたが、改めて、昔惚れた恋人の美点を再認識する思いであつた。吉本隆明はやはり、どんな時、どんな問題に向かつててもラジカルな問いを忘れない人、そういう誠意の人だった。われわれは彼のそうした批評姿勢にこそ撃たれてきたのであつたらう。

この『ことばの力 うたの心』には「歌人論」として、長塚節から俵万智まで一八人の歌人があげられている。むろん本文中に名が出てくる歌人の数は数え切れないが、なかでは斎藤茂吉のように五章も当てられている人もあれば、二、三ページで終わる歌人もいる。あるいは、村上一郎や岸上大作の

の発生も関わっているかもしれない。われわれは歌でも詩でも、基本的にその意味に引つ張られて読み考へてしまふが、文字のなかつた時代で想像してみれば、ことばは意味よりも先にまず音の世界だ。人を喜ばせたり泣かせたり慰めたりするのは、その根源は意味以前の音そのものなのかもしれない。著者はここで、意味を棄てた音それ自体が面白い、そのことによつて反つて意味ありげに見える歌や詩を例に挙げてみせている。こんなところを読みながら私も、藤原道長の「つぎづきにつきみるつきはおおけれど」とか、以前この欄で紹介した『偶然短歌』が拾つてみせている「アルメニア、アゼルバイジャン、ウクライナ、中央アジア、およびシベリア」などの、偶然から生まれたナンセンス短歌のおもしろさ、などと言うことを考えていた。この章の著者の結論は、「音は意味を離れて、メタフォワを形成しうる、というふうな徹底的に考えないと短歌の良さが分からない」ということになる。





〈歌・小説・日本語〉⑩

## 吉本隆明の短歌論(二)

勝又浩

前回紹介した「ことばの力 うたの心」(令和四年)に刺激されて、以前求めたままツン読にしていた『写生の物語』(平成二二年)を読んだ。こちらはもと「短歌研究」に連載されたもので、

表題にあるテーマにそって緩やかながら古典から現代歌人まで通時的に見渡している。古典では万葉から琉歌、百人一首などを取り上げているが、なかで特異なところは、西行ではなく法然の歌を論じているところ、あるいは天理教の中山みき「おふでさき」や、大本教の出口ナオ「大本神論」などまで論じているところだろう。ともに短歌そのものではないが、そこに「短歌的音数律に乗ったリズムとメロディの無限旋律」が見られる例だとしている。

ろにおつかると、私はもう先に進めなくなってしまう。関連して思うこと、考えることが噴出してくるからだ。しかし当然、すぐに解決するはずもないから、結局は一つの説として半分は受け入れ、あと半分はいつの日か自分なりに確かめ、突き詰めてみたいと、宿題が残ることになる。吉本短歌論にはそんな問題がたくさんある。

少し補足しておく、前記の一節は斎藤茂吉の言った、短歌の「声調」という問題に触れて言われている。前回にも触れたが、茂吉短歌論の骨子には「写生」と「調べ」という観念がある。それは、なかなか定義しがたい、しかし歌の生命を決する大事な要素でもある。そういうことを斎藤茂吉は歌のなかで読み取り、聞き取って感嘆し、解説もしてゆくのだが、そこを吉本隆明はあくまでも理論的に、それがどこから来るのか、何によるのかと追究しているわけだ。ここではそれを歌のリズム、音数律という要件から説明しようとして、前記のように、まず五七五七

短歌論のなかに天理教や大本教の聖書が出てくるとは驚くが、そういう展開がこの本全体の性格である。

言い換えると、この一冊は「一応は「写生」をテーマにしているが、ことさら言ってみれば、現象としての写生を超えて、あるいはその背景として、そもそも写生とは、そして短歌とは、という問題を基本のところに置いているからであるだろう。そういうところが吉本短歌論の、他の歌論評論とは違うところであり、また私のような門外漢にも面白く読めるところ、大いに刺激を受けるところである。取り上げられた歌や歌人について個々には知らない場合でも、そこから読み取られている意味にはついては大いに話ができるとい

七という定型が短歌を基本的に「悲劇調」にしている、それが短歌の「宿命」なのだと断ずる。そして、その例証として、次には短歌から俳諧が生まれてきた背景を、著者は指摘する。滑稽や軽みに向かう俳諧が生まれてくるためには短歌から下句の七七を捨てる必要があったのだ、と。なるほど、川柳のような機智短歌や風刺短歌は、あつたとしても、それは決して歌の本流にはなりえないだろう。短歌はやはりどこか悲劇的、あるいはどこか生真面目で哀切という性格から逃れられないのかもしれない。思うに、歯切れのよい五七五は長調を形成するが、纏綿する七七は情緒を取り込んで全体の悲劇調、哀切調を決定づける、ということになるのだろうと、私などは想像もする。

「俳諧歌を生み出す契機になる」が、もう一つは「重さの全てを下句にかけてしまい、分節化は深刻になるほかない」と言うのである。要約してしまえば、三句目の句切れを持たない歌は必然的に「重く」なり、その結果、悲劇調を形成するのだということだろう。こう論じた後、著者は上田三四二、大西民子の歌を引いて、悲劇調短歌の典型を示している。ここには上田三四二の方だけあげてみる。

そひ臥してはぐくむごとくある妻  
のさめざめ涕けば吾は生きたしよ  
術後の身浮くごとく朝の庭にたつ  
生きてあぢさみの花にあひにし

優れた歌が短歌の持つ悲劇調を実証しているのか、短歌が本来持つ悲劇調が歌をいっそう美しくしているのか、私には判断がつかない。

という次第で、問題はまだまだ続くのである。





〈歌・小説・日本語〉⑦  
吉本隆明の短歌論(三)

勝又浩

たとえばこんな一節がある。

「〈短歌謡〉から〈和歌〉へという過程は形式上の変化ではない。いずれも三十一文字であることに変わりはない。また呼び方のちがいにすぎないといって済ますつもりはない。上句と下句のあいだの転換がどう変化したかに〈短歌謡〉から〈和歌〉の成立への、もつとも重要な鍵がかくされているはずである。」

〈短歌謡〉とは著者の造語だが、ここではその意味を言っている。外から一口に言ってしまうと、歌謡の性格を残した短歌、ということになる。では、歌謡と短歌、和歌を分けるものは何かと問うて、上句と下句の中、五音句の働き方によるのだ、としている。

だが、しかし「古歌体」や「神妙体」等とはともかく、「器量体」とか「比興体」などと言われても、いくらその例歌を示されてもピンとくるものはない。この口語短歌時代に、これらから教わったり刺激されたりする要素はないように思われた。専門家でもない我々には、こんなところは数例で済まして、あとは手取り早くその意味を言ってくれば充分なのだ。

頼まれたわけでもない紹介をしながら注文をつけるような結果になってしまったが、おそらくはこの辺りが、他書にも共通したこの著者の難点だと思われる。以前、期待して読んだ「西行論(平成二年)でも同じような不満があったことに思い当たる。

ちなみに本書全体はこんな構成になっている。「歌の発生」「歌謡の祖型」「枕詞論(正統)」「歌体論(正統)」「和歌成立論」の七章である。書名になっている「初期歌謡」の語がないが、意味は、これら七章の論考がすべて「初期歌謡」をめぐる検討論考なのだ。言

吉本隆明の短歌論、今回はさらに遡って『初期歌謡論(昭和五二年、河出書房)を読んだ。と言って早速余談になるが、本書は、実は刊行当時読みかけて、内容があまりに細微、そして壮大に過ぎて付いてゆけず、後日折があったら読み直そうと放棄した一冊だった。それからすでに四十余年も経ってしまった事実には驚くが、この欄のお陰でその「折り」が巡ってきたと考えれば、それも面白い。今や日々想定外の年月を生きているが、なお、こんな再会もあるのかと思うと、まったく「命なりけり」である。

それで再読だが、今回もその微細や壮大、徹底ぶりには半分閉口しながら、あとの半分は「種の力技に改めて敬服

い換えると、吉本隆明の見解では、「和歌」成立以前はすべて「歌謡」なのだ。その歌謡と和歌とを分ける分岐点、条件を、さまざま角度から探っているのが本書だと言つてよいであろう。こう補足しておいて冒頭の引用に戻るが、〈短歌謡〉とは、砕いて言ってしまうと、短歌でもあり、歌謡でもある性格の歌だとみてよいであろう。先の引用文に続けて著者は、こういう議論のとき必ず引き合いに出される、「八雲立つ 出雲八重垣 妻こみに 八重垣作る その八重垣を」(「古事記」)の例を挙げて、それへの契沖の解釈を紹介している。明らかな歌謡でありながら、同時に形式的には短歌になっている原初の例というわけである。歌の三十一音という陽数(奇数)構造を、「神慮により出でたる事」だという、高踏譚話みたいな説である。これをご愛敬のよう

に挟んだあと、対照するように柿本人麿から四首を採って示している。二首だけ引いてみよう。  
石見なる高間の山の木の間より我

しながら、いい勉強をさせてもらった、といったところである。微細というのは、たとえば枕詞を藤原清輔「和歌初学抄」に寄りながら全ての例を挙げて見せているようなところである。枕詞などは今は全く使われなくなった古語だ。その語源を論じたり探訪したりということは今もあるが、消滅したことばを全て列記するのは、仮に実作者が読んでも役に立つようなものではないだろう。そういうものを延々と並べて見せる著者の意図が分からない。

あるいは、かつて行われた短歌の分類を論じたところでは、壬生忠岑の「和歌体十種」なる書を取り上げて十種全てにわたつて紹介、さらにそれを藤原定家の分類、「定家十体」と比較、その対照表まで示している。「定家十体」の方はそのなかで使われた「幽玄」の語などの関連で我々も知る書ではあるが、忠岑の「和歌体十種」は、私は初めて聞いた。定家以前に既にこんな試みがあったのかと感心し、興味深くはあ

が振る袖を妹見けむかも  
秋山に散る紅葉の暫くも散りな乱れそ妹があたり見む

爽やかな、詠っている人の純で力強いオーラが伝わってくるようないい歌だ。吉本隆明もことばを尽くして褒めているが、この一首が秀歌であるゆえんは、茂吉などが言うような声調や音韻などから来るのではないとして、次のように指摘する。一つは、上句の客観と下句の主観の間に単純な論理の因果が流れている事実、二つは、歌に「内省や懐疑がまだやってきてない」結果、「強く〈短歌謡〉の初原の形をよびさまされる」からだ、と。

これはこれとして納得できるが、一方、前回紹介した、短歌は上句と下句を繋ぐ中の五音句の働き方、性格が歌全体の性格を決めるといふ吉本説との関係も気にかかる。こうした短歌解析方程式を、吉本隆明は、歌謡から短歌、そして和歌へという展開史のなかで掴んでいた、そう言つてよいかもしれ